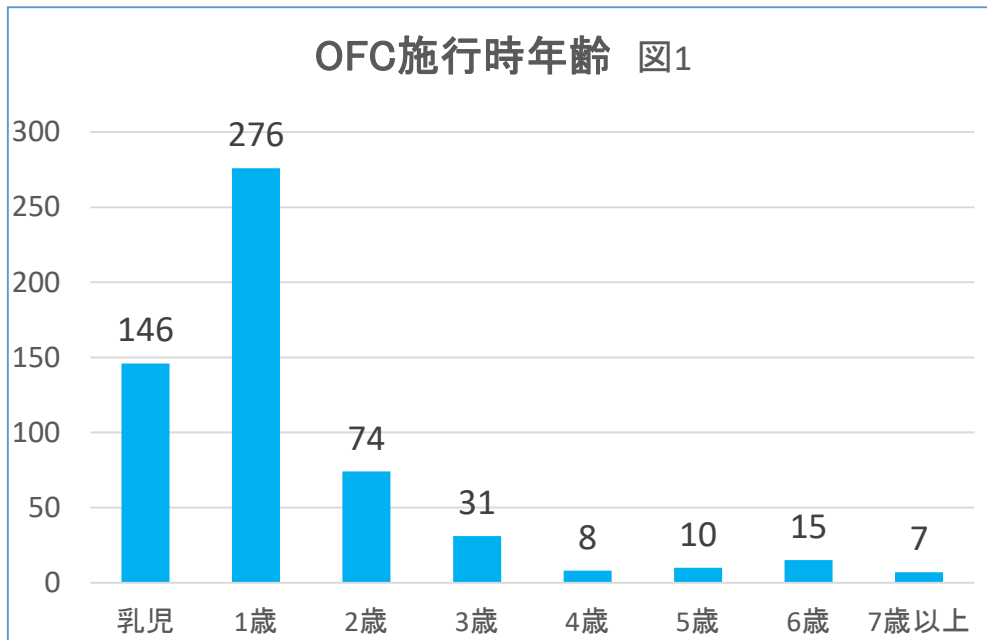
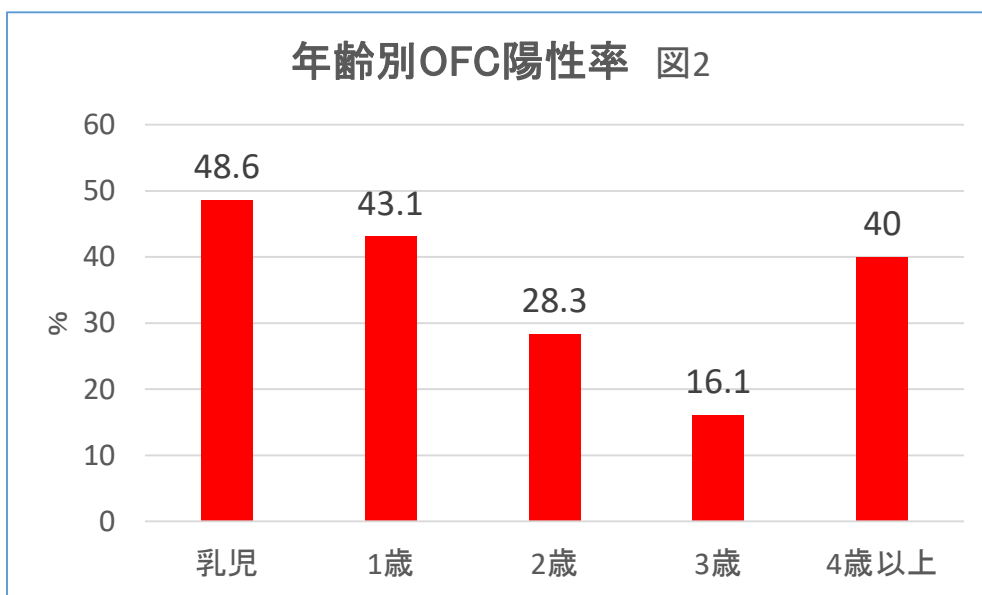


～食物アレルギーの早期介入～

当院小児科では、以前から乳幼児の食物アレルギー診療に注力しておりますが、症例数は年々増加しております。2015年5月の開院から2023年3月まで、延べ800名以上のお子さんに日帰り入院の経口負荷テスト(OFC)を施行しました。日本小児アレルギー学会のガイドラインに基づき、OFCによる確定診断と、その後の食事指導(主に鶏卵・乳・小麦)を行っていきます。「乳児早期からの積極的早期介入」を当科の基本的方針としています。以下2021年までのデータ解析です。

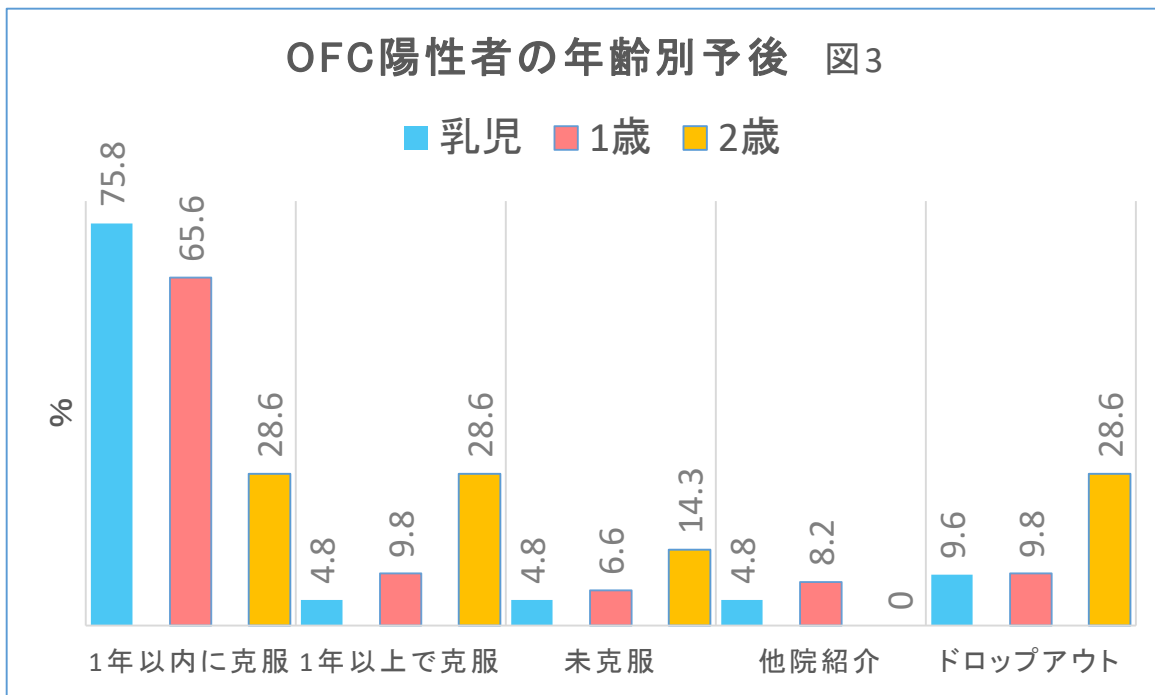


〈OFC施行時年齢:図1〉 1歳が276例(48.9%)と最も多いですが、乳児のお子さんにも生後5ヶ月から146例(25.9%)施行しました。当院では3歳以下のお子さんがほとんど(93.4%)です。



〈年齢別OFC陽性率:図2〉 陽性のお子さんは半分以下に過ぎない、ことに着目してください。RAST数値が陽性のみを理由に1歳まで完全除去を指導されているお子さんを良く経験しますが、OFCを施行することで無用な除去を止めることができます。また陽性率は年齢と共に減少します。4歳以上は比較的難治の症例です。

OFC陽性者の年齢別予後 図3



〈OFC陽性者の年齢別予後：図3〉OFC陽性だったお子さんでも、2歳以下のお子さんでは1年以内に克服される方が多く、特に乳児は75.8%と最も高率となります。このことから、「早期に安全量を確認し摂取指導することで、克服時期が早まる可能性がある」と考えています。これが我々が早期介入をする理由です。1ml以下の牛乳で全身蕁麻疹が出たお子さんでも、短期間で200mlが摂取出来るようになることもあり、食物摂取制限の解除でご家族のストレスはかなり軽減します。

まとめ

- 乳児期の介入で早期克服が期待出来る可能性があります。
- RAST陽性や軽度の症状のみで、1歳まで除去指導する必要はありません。
- 当院のOFCは原則1日1例で、十分な観察が可能、追加の負荷も柔軟に対応します。
- 難治例は、あいち小児センターに紹介します。



プレイルームでの検査風景

食物経口負荷テスト(半日入院)の流れ

通常の外来(月・水・木)受診し検査の説明、同意書、予約



当日は8:30に5階西病棟へ(食物持参)



重症度に合わせて摂取量や摂取間隔を設定
例えば、茹で卵白 1g-2g-5g-10g-20g(30分間隔)



症状が出ればそこで検査終了、必要なら治療(内服薬など)



自宅での摂取指導後帰宅



以後定期的に電話で摂取状況確認し可能なら増量



そのまま寛解、または半年以上空けて再検査